

<小学校 特別活動>

自発的, 自治的な実践力を育てる児童会活動

— 異学年交流を通して —

玉城村立船越小学校教諭 友寄 弥栄子

目 次

I 研究テーマ設定の理由	61
II 研究仮説	61
III 研究内容	62
1 特別活動及び児童会活動の意義	62
2 自発的, 自治的活動について	62
3 自発的, 自治的な実践力を育てる活動の工夫	63
4 自発的, 自治的な実践力を育てる教師の支援	64
IV 実践事例	66
1 議題が決まるまで	66
2 指導のねらい	66
3 活動の過程と教師の支援	66
4 活動計画及び実施計画	68
V 研究の成果と今後の課題	70
1 成果	70
2 課題	70

＜小学校 特別活動＞

自発的、自治的な実践力を育てる児童会活動

— 異学年交流を通して —

玉城村立船越小学校教諭 友寄 弥栄子

I 研究テーマ設定の理由

児童は、学校生活の中で、どの時間に楽しさを感じているのだろうか。アンケートを採ってみると、友達と自由に過ごせる「休み時間」が一番多く、次に「特別活動の時間」を挙げている。特別活動は、集団活動を通して、自主的、実践的に学ぶ教育活動である。その内容は、児童が興味、関心を持って、自発的、積極的に行える活動を多く含んでおり、個性を発見し、自己を生かす場や機会も多いと考える。特別活動の一内容である児童会活動は、学校生活に関する諸問題を自発的、自治的に解決することを特質とし、そのことが重視されている。

児童が、児童会活動に見いだしている「楽しさ」が、自分たちの自発的、自治的活動の結果生まれたものであるならば、児童会活動のねらいは、達成されていることになる。しかし、児童の参画のない活動での「楽しさ」では、満足感や充実感はそれほど得られないと思われるし、児童会活動としての意義も少ないと考える。

これまでの児童会活動の実践を振り返ってみると、児童は、行事を終えた後、それなりの満足感はあるものの活動の過程においては、自分たちで考え、自分たちの力で取り組んでいく姿勢があまり見られなかった。例えば、児童会役員は、行事の運営を中心になって進めていかねばならないが、分担された仕事を責任を持って取り組めなかったり、担当教師がいない場合、自分たちで計画通り進めることができなかった。また、行事の具体的な準備は、学級単位で行ってきたが、高学年では、「割り当てられたからやる」という消極的な姿勢が見られた。集会活動においては、全体的に楽しそうに参加しているが、運営している児童以外は、教師の指示で行動している様子が多く見うけられた。

活動に児童の創意工夫が活かされ、自発的、自治的に関わることが多ければ多いほど、児童の満足感や充実感は大い。さらにそれは、次の活動への意欲にもつながる。つまり高学年児童の自発的、自治的な実践力を育てることが充実した児童会活動を創り出すことにことになる。そのためには、活動に低学年児童との交流を取り入れると効果的であると考え。同学年同志では積極的になれない場合でも、低学年児童の前では高学年の自覚や責任のもとに活動することが考えられるからである。その場合、交流のあり方を工夫し、高学年児童の自発的、自治的な活動が促せるようにすることが大切である。また、そのような活動を促し、支えるものとして教師の支援は不可欠であると考え。児童会の諸活動を学校全体の共通の問題として全教師が理解し、協力して取り組んでいけるような態勢を作り、児童の活動を支援していけば、より充実した児童会活動が期待できるであろう。

そこで、高学年児童と低学年児童との関わりが持てる異学年交流のあり方を工夫し、教師がその活動を支援していけば、児童は自発的、自治的な実践力を培っていきえるだろうと考え本テーマを設定した。

II 研究仮説

児童会活動において、異学年交流のあり方を工夫し低学年児童との関わりを多く持たせるとともに、活動の過程で教師が適切な支援をしていけば、高学年としての自覚や活動意欲が高まり、児童は自発的、自治的な実践力を培っていくであろう。

Ⅲ 研究内容

1 特別活動及び児童会活動の意義

今日の社会は、少子化が進行している。また社会環境の変化に伴って子どもの遊びも大きく変容し、遊び集団が見られなくなってきている。そのような社会環境の中で、人間関係の希薄化が進むと共にかつては兄弟姉妹や自然発生的な遊び集団における人間関係の中で培われてきた社会性や自発性、自治性なども育ちにくくなっていると指摘されている。

特別活動は、望ましい集団活動を通して、自主的、実践的に学ぶ教育活動である。自主的、実践的な動を通して、望ましい集団生活や人間関係が築かれる。児童会活動は、学校生活の充実と向上を目指して、全児童が協力して自発的、自治的に諸問題を解決する集団活動である。つまり、特別活動・児童会活動は、学校教育の他の領域では容易に育成できない児童の自発的、自治的な態度を養う大切な場で、自発的、自治的な活動を通して望ましい人間関係が深められる活動なのである。

今日の社会的課題である望ましい人間関係の形成や自発的、自治的な態度の育成の観点から、このような特質を持つ特別活動・児童会活動は、教育課程の中で今後もっと重視し充実していく必要があると考える。

2 自発的、自治的活動について

(1) 児童会活動における自発的、自治的活動

小学校指導書特別活動編には、児童会活動の目標を次のように示している。「児童が、自分たちの学校生活を向上させようとする意図の下に、学校生活に関する諸問題を解決する活動及び学校内の自分たちの仕事を処理分担する活動を自発的、自治的に行うことによって、自主性と社会性を養い、個性の伸長を図る。」「自発的、自治的に行うことによって」とは、「児童の自主的な活動を重んじ、児童の発想や創意を生かし、自らの手で実践を目指したものであり、なすことによって学ぶという特別活動の指導原理を踏まえたものである。・・・児童の自発的、自治的な活動そのものが目標達成の基本と言えよう。」とある。このように、児童会活動において自発的、自治的な活動は、最も重視されるものである。

児童会活動における自発的活動とは、児童自らが他からの指示を受けることなく、自らの力でなすべきことを考え、自分の意志で行う活動と捉える。自治的活動とは、児童自らが、自分たちの問題や仕事を処理するために、他の力を借りないで、自らの責任で活動を計画、運営し反省していく活動と捉える。このような自発的、自治的な実践活動の積み重ねによって、自主性と社会性が養われ、個性の伸長も図られると考える。

(2) 自発的、自治的活動を育てる指導

児童の自発的、自治的な活動を育成するためには、何よりも児童の「発意・発想」を最大限に重視することが大切であると言われるが、児童の発達段階から考えると、児童の自治的な活動の範囲が限られてくるのは当然である。したがって、自発的、自治的な活動は、「放任」しておいて育つものではないしまた、教師が「管理」し過ぎているような状況の中で育つものでもない。このことは、指導要領の「内容の取り扱い」においても、「学級活動、児童会活動及びクラブ活動の指導については、指導内容の特質に応じて、教師の適切な指導の下に、児童の自発的、自治的な活動が展開されるようにすること。」と示している。つまり、指導にあたっては、適切な指導助言を行い、望ましい自発的、自治的な実践力を「育てる」努力が必要であるということである。

「特別活動実践論」で、杉田は、自治的活動を育てるための五つの段階を次のように示している。

A「教えて理解させる」段階

B「教えながら児童・生徒にやらせてみる」段階

C「かなりの指導・助言が必要だが、児童・生徒に任せてやらせてみる」段階

D「Cの段階を定着させ、話し合い活動や実践活動をより高める」段階

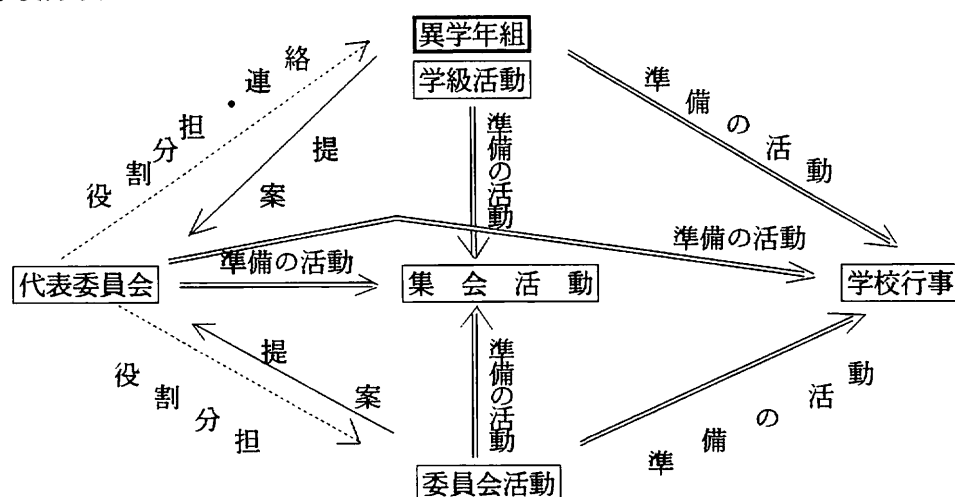
E「ほとんど児童・生徒の自治的・自発的活動に任せる」段階

大きく分ければ、A・Bの段階とC・D・Eの段階の二段階である。

低学年ではA・Bの段階が主になると思われるが、高学年においてもAの段階が理解されてなければ次の段階は無理だということになる。自発的、自治的な活動を育てるには、このような指導段階を踏まえて指導していくことは、大切なことだと考える。

3 自発的、自治的な実践力を育てる活動の工夫

児童会活動には、「代表委員会活動」「委員会活動」「集会活動」の三つの内容がある。これらの内容は、相互に関連しながら展開するものである。また、特別活動の他の内容（学級活動・クラブ活動・学校行事）とも互に関連している。図で示すと次のようになる。



低学年と高学年の異学年交流を通して、高学年児童の自覚を促し、思いやりや責任感などを養うことで自発的、自治的な実践力が培われると考える。異学年交流とは、例えば単に集会活動で学級・学年対抗のゲームなどをするということではない。低学年と高学年が組になって活動をし、相互理解や相互協力を図ることである。異学年交流は、図で示した互いの活動の関連において可能になる。そこで、自発的、自治的な実践力を育てる異学年交流の在り方を考えてみた。

(1) 活動の場の確保

児童会活動の授業時数は、地域や学校、児童の実態に応じ学校独自に定めることになっているが、自発的、自治的な実践力を育てる場を数多く確保することが大切である。異学年集団の活動となると全校児童が関わる集会活動は勿論、その他の児童会活動や特別活動及び教育活動でも試みることができる。

異学年交流が可能な場として本校の事例を挙げてみる。

- ・集会活動・・・ロングの集会（1年生を迎える会・6年生を送る会・収穫祭）
ショートの集会（ゲーム集会）年3回
- ・その他の児童会活動・・・（募金活動・卒業壁画作成）
- ・その他の特別活動及び教育活動・・・（学級活動・勤労生産活動・給食指導）

(2) 異学年の組み合わせ

異学年交流では低学年と高学年の組み合わせが大切であり、次のような組み合わせが考えられる。

- ①縦割り組・・・・・・1年生から6年生までの同一学級を組にする
- ②低高二学年組・・・・低学年と高学年の二学年を組にする（小規模校に適している）
- ③縦割り二学年組・・・・低学年と高学年の同一学級を組にする
- ④三学年組・・・・・・低学年、中学年、高学年の三学年を組にする

(3) 活動内容と方法

自発的、自治的な実践力を育てる異学年交流にするために、その内容の条件と方法を次のように考えた。

①内容の条件

- ・高学年と低学年が組になって取り組める内容にする。
- ・1年生から6年生までの全校児童が楽しんで取り組める内容にする。

- ・低学年児童にも理解できる内容にする。
- ・異学年交流を通して高学年児童の自覚が促せる内容にする。
- ・高学年児童が低学年児童に対して模範を示せるような内容にする。
- ・高学年児童が企画運営できるような内容にする。

②方法について

- ・児童会行事の際、各学級単位の「準備の活動」の他に異学年で取り組む「準備の活動」を取り入れる。
- ・「準備の活動」は、高学年児童を中心に行い、低学年児童をリードするようにする。
- ・「当日の活動」に、異学年組で行う内容を多く取り入れる。
- ・児童会行事後も学年、学級ごとに交流を継続する工夫をする。
- ・学級活動を通して交流する。（お手紙交流、合同お楽しみ会等）
- ・教科を通して交流する。（学習発表会への招待等）
- ・日常的な交流をする。（交流給食、学級園の世話等）
- ・勤労生産活動を通して交流する。（農作物の世話、収穫等）

（４）代表委員会活動の工夫

児童会行事は、代表委員会での話し合いを経て実施計画が作成されたり連絡・調整などが行われている。代表委員会への参加は、高学年児童のみであるが、代表委員会活動において高学年児童と低学年児童との関わりが生まれる活動として次の活動が考えられる。

- ・代表委員会で決定したことを低学年学級に説明したり知らせたりする。
- ・活動の内容や、具体的な方法等を直接教える。
- ・異学年で取り組む「準備の活動」の際には、中心になって進める。

４ 自発的、自治的な実践力を育てる教師の支援

「学校新時代・特別活動の理論」で児島邦宏は、教師の支援と特別活動について次のように述べている。

「子ども主体の学習活動を求めるとき、子供自身が課題に取り組み、どうすればよいかを考え、選取り、行動するように教師が仕向け、後押しする教師の役割を今日では『支援』と称している。集団活動を通して、『自主的、実践的態度』を育てることを目標とする特別活動においては、教師の『支援』が『命』であるといって過言ではない。」

この「支援」は、児童会活動の指導における「教師の適切な指導」と基本的に同一のものとする。この考えを基に児童会行事実施の手順とその活動過程での具体的な「支援」を考えてみた。以下の「支援」は、前述した杉田の「自治的活動を育てるための五つの段階」を踏まえて行っていくようにする。

<児童会行事実施の手順>	<教師の支援>
原 案 作 成 =====> 職員会議へ提案 ↓ ・計画委員会で原案を作成する	(計画委員会への支援) ・原案の形式を示す ・児童会のめあてを基に行事のめあてや内容を考えさせる ・昨年の反省を基に内容を考えさせる ・原案の内容を充分理解させる ・代表委員会への提案の技術を示す ・職員会議へ原案と活動計画を提案し、活動のねらい、内容、方法の共通理解を図り、協力を得る

代表委員会へ提示 ↓ ・原案を代表委員会へ提示し説明をする	・計画委員の説明の補足をする ・代表委員に原案の内容を充分理解させる ・代表委員に学級での提案や話し合いの技術を示す
各学級で討議 ↓ ・原案について話し合い、疑問や意見をまとめる	・担任は代表委員が原案を説明したり話し合ったりする時間を確保する ・担任は、代表委員の説明を補足する ・担任は、全校的視野に立った建設的な話し合いができるよう話し合い活動を支援する
代表委員会で討議・決定 ⇒ 職員会議へ報告 実施計画作成 ↓ ・実施計画を作成する	・計画委員に話し合いの技術を示す ・計画委員に実施計画の形式を示す ・職員会議へ実施計画の報告をし確認をする
なかよし学年 各学級 全校児童 ↓ ・実施計画の連絡や説明をする	・代表委員になかよし学年、学級への連絡の技術を示す ・計画委員に広報活動の方法を示す
準備の活動 ↓ ・計画委員会、なかよし学年、各学級、委員会は準備をする	・準備するもの、役割分担、作業計画などを明確にさせる（話し合い活動で） ・「準備の活動」の時間を確保する ・児童の発想を重視する ・異学年組での準備の場合、高学年児童のリーダー性が発揮できるようにする ・「準備」の進行状況を常に把握しておく ・本番へ向けて原稿を準備させる ・本番へ向けて練習をさせる
当日の活動 ↓ ・実施計画に従って進行する	・計画委員の進行の補助をする ・担任も一緒に活動に参加する
事後の活動 ↓ ・活動の様子を全校児童で確かめる	・活動の様子が確認できるような活動をさせる ・活動後も学年、学級ごとに異学年交流を継続するような工夫をする
児童の評価 教師の評価 ↓ ・行事の評価を児童、教師の両方から行う	・できるだけ実践直後に評価の時間をとる ・運営を担当した児童への励ましの言葉を掛ける ・次への活動意欲につなげる言葉掛けをする

IV 実践事例

集会活動（ショートの集会） 「ふれあいなかよし集会」

1 議題が決まるまで

本校では、毎週火曜日の始業前（８：１５～８：３０）を「児童朝会」として設定し、内容は年間計画で決められその中に集会活動が組み込まれている。これまで、ショートの集会は、委員会の発表が主であり、その他の内容は、２回しか計画されてなかった。そこで学校生活をより楽しくするために、また小模校の利点を生かして、異学年や全校児童がふれあえる内容を組み入れることにした。学期１回年３回を計画し、計画委員会（児童会役員、集会委員会）が中心となって計画、運営することにした。

計画委員会で児童会年間計画や児童会のめあてを話し合い、今年は新たにショートの集会にゲームをしようということが決まった。

2 指導のねらい

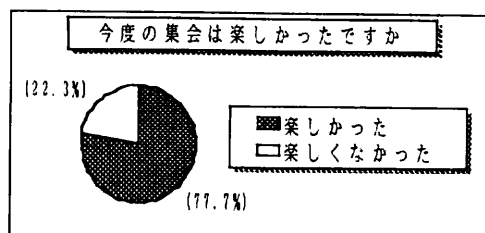
- ・全校児童が一堂に会し、ゲームを通して異学年や全校児童とのふれ合いを深め、楽しい学校生活を自らつくっていく。
- ・異学年組み合わせのゲームを通して高学年児童が自発的、自主的に活動する態度を育てる。

3 活動の過程と教師の支援

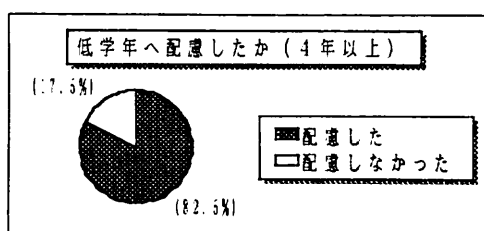
【 活 動 の 過 程 】	【 教 師 の 支 援 】
(1) 集会が決まるまで ① 原案作り 行事を行うにあたって、議題を提案する側が案を作成することから始まる。計画委員に原案の作り方を指導しながら教師と共に作った。委員の児童は、異学年が組になる適当なゲームが考え出せず、教師の案を基に児童の意見を取り入れた内容とした。	・原案の形式を示す ・集会のねらいは、児童会のめあてを基に考えさせる ・内容は、児童の考えを取り入れながら教師の案を提示する ・原案の内容を十分に理解させる
② 職員会議へ提案 原案作成後、全職員の共通理解と協力を得るため職員会議に提案し了解を得た。	・集会のねらい、内容、方法を説明し、共通理解を図り協力を得る ・集会実施までの活動計画を示し、取り組み全体の流れが分かるようにする
③ 代表委員会へ提示 職員会議への提案、了解の後、原案説明のための代表委員会を開いた。定例の時間が取れないので休憩時間に行った。	・計画委員の説明の補足（代表委員に原案の内容を充分理解させる） ・代表委員に学級やなかよし学級への連絡の技術を示す（連絡原稿・低学年担任への連絡）
④ 学級での話し合い 代表委員会では提示された原案を学級に持ち帰って話し合う。今回は、ショートで集会であり学級で話し合う内容は少なかったため朝の会や帰りの会などで話し合われた。	・担任は、原案についての話し合いの時間を設定する ・担任は、代表委員の説明の補足や話し合いの進行の支援を行なう ・担任は、原案に対して建設的な意見がでよう話し合い活動を指導する

⑤ 代表委員会で討議、決定 原案提示から一週間後に定例の代表委員会を開いた。学級で話し合ってきたことをもとに質問や意見が出された。人数があわない場合は、同学年で二人組みになりゲームをすることになった。原案が承認され実施計画が作成された。	・計画委員に代表委員会の話し合いの技術を示す（話し合い原稿） ・計画委員に実施計画作成の方法を示す ・職員会議に実施計画の報告をし確認をする
⑥ 各学級・なかよし学級・全校児童への連絡 代表委員は、代表委員会で決定したことを学級やなかよし学級に報告した。計画委員会は、全校児童への広報活動をした。	・代表委員に学級、なかよし学級への連絡の技術を示す（連絡用紙、連絡原稿） ・計画委員に広報活動の方法を示す（校内放送・ポスター）
(2) 事前（準備）の活動 代表委員は学級・なかよし学級にゲームの方法を教えた。各学級では、ゲームの練習をした。計画委員は、集会に使う道具の作製や進行のための準備をした。	・担任は、ゲームの練習のための時間を設定する ・担任は、代表委員を中心にゲームの方法を教える ・道具の作製は、計画を立てて進める ・計画委員は、本番へ向けて司会シナリオを準備させ、進行のリハーサルをさせる
(3) 当日の活動 一学期初めての運動場での集会であった。計画委員、放送委員は8時以前に登校し集会の準備にあたった。集会合図の放送で児童は運動場に集合し、なかよし学年の組になって並んだ。集会は計画委員会の手で運営されていった。「おさななじみ」のゲームでは、児童の説明だけではよく分からず、ゲームを中断して教師が改めて説明し直した。その後は、高学年児童が低学年児童をリードしてゲームをする姿が見られた。なお、実施計画にはなかったが、集会終了後は、なかよし学年同士手をつないで退場させた。	・計画委員の集会進行の補助をする ・担任は、一緒にゲームに参加する
(4) 事後の活動 集会の様子をビデオなどで見るのも自分たちの活動を確かめるうえで大切である。放送委員会がビデオ放送、掲示委員会がスナップ写真掲示を担当した。	・集会の様子を確認する方法を話し合わせる（ビデオ放送・スナップ写真の掲示・児童会便り等） ・委員会へ仕事の依頼をさせる（連絡用紙） ・委員会担当教師へは、事前に依頼しておく
(5) 評価 集会の印象が新鮮な集会直後に児童の反省を質問紙法で採った。計画委員には、さらに、質問項目を換えた反省を実施した。指導計画及び指導方法について教師の側からの反省も行った。	・できるだけ集会直後に反省の時間を設定する（集会后、朝の会、帰りの会） ・次の活動への意欲につながる言葉かけをする

(児童の評価)



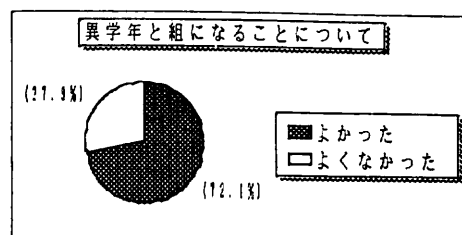
- ・約4分の3の児童が楽しいと答えているので集会のめあては、ほぼ達成されている。
- ・楽しくなかったと答えているのは3年生に多い。学年の近い4年生との組み合わせで恥ずかしさがあったと思われる。



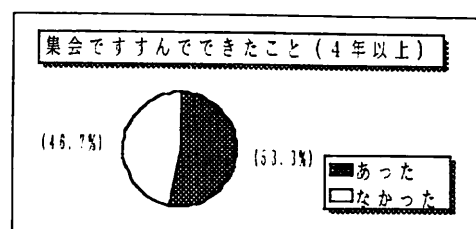
- ・低学年と組になるのは初めてのことであったが高学年としての行動が見られる。

(教師の評価)

- ・計画委員児童は、計画から準備、当日の運営までよく頑張った。放送委員も進んで活動していた
- ・異学年の交流が持てて良かった。
- ・代表委員が前もってなかよし学級に内容を伝えたのは良かった。
- ・ゲームの方法をテレビで放送したのは良かった。
- ・全学年ともゲームの方法が行き届いてなく戸惑っていた。代表委員の活動の充実が必要。
- ・全体的に学級でのゲームの練習が足りなかった。
- ・ゲームのやりかたの放送をもっと活用し雰囲気盛り上げる必要があった。
- ・ゲームでは、高学年児童がリードしている姿が見られた。
- ・3年生と4年生の組は、学年が近すぎ、お互いに恥ずかしそうにしていたので、1学期の組み合わせとしては適当でなかった。



- ・4分の1強の児童がよくなかったと答えている。
- ・異学年が組になってゲームをするのは初めてだったので戸惑いがあったと思われる。



- ・ショートな集会だったので高学年児童が進んで活動する場が少なかったのではないかな。

4 活動計画及び実施計画

月日	曜日	活 動 内 容	活 動 時 間
6/10	水		
11	木	児童会活動年間計画作成	休憩時間
12	金	集会活動の内容の話し合い	"
13	土		
14	日		
15	月	〔計画委員会〕原案作り	休憩時間
16	火	〔計画委員会〕仕事分担	"
17	水	〔計画委員会〕準備の仕事	"
18	木	〔計画委員会〕準備の仕事	"
19	金	〔計画委員会〕準備の仕事	"
20	土		

21	日		
22	月	〔代表委員会〕原案提示	休憩時間
23	火		
24	水	〔各学級〕原案について話し合う	学活・朝の会・帰りの会
25	木	〔計画委員会〕準備の仕事	休憩時間
26	金	〔計画委員会〕準備の仕事（ゲームの仕方録画準備）	〃
27	土		
28	日		
29	月	〔計画委員会・放送委員会〕準備の仕事（ゲームの仕方録画撮り）	休憩時間
30	火	〔代表委員会〕原案討議、実施計画作成	6校時(定例代表委員会)
7/1	水	〔代表委員〕学級、低学年なかよし学級に実施計画の連絡、ゲームを教える 〔各学級〕ゲームの練習をする	朝の自習時間 朝の会、帰りの会等
2	木	〔計画委員会〕準備の仕事（集会の流れ練習） 〔放送委員会〕準備の仕事（「ゲームの仕方」放送）	休憩時間 お昼の校内放送
3	金	〃	お昼の校内放送
4	土		
5	日		
6	月	〔計画委員会〕準備の仕事（集会について放送・集会進行の確認）	お昼の校内放送
7	火	集会当日、〔計画委員会・放送委員会〕準備・進行の確認	児童朝会 8:15～8:30
		〔掲示委員会〕集会スナップ写真の掲示	朝の自主活動・休憩時間

（ふれあいななかよし集会）実施計画 10年6月30日（火）			
1 いつ	7月7日（火）8:15～8:30（児童朝会）	2 どこで	運動場
3 めあて	ゲームをして1年生から6年生までみんななかよくなろう		
4 何を	・「足ジャンケン」のゲームをする ・「おさななじみ」のゲームをする		
5 方法	・ゲームは「なかよし学年」の組になってやる。（「なかよし学年」の組は、別紙） ・ゲームは、代表委員を中心に学級で練習する。 ・低学年学級へは、「なかよし学年」の代表委員が教える。 ・低学年学級は、担任とも練習し、ゲームの仕方が分かるようにする。 ・計画委員は、お昼の放送でゲームの仕方を知らせる。 ・当日の並び方は下図の通り 隊形 指揮台 △△△△△△△△ ↑↑↑↑↑↑↑↑ （6年と1年） △△△△△△△△ ↑↑↑↑↑↑↑↑ （5年と2年） △△△△△ ↑↑↑↑↑ （4年と3年）		
6 準備の活動	・足ジャンケンカード（計画委員会） ・集会看板（〃） ・プログラム（〃） ・司会進行（〃） ・集会についての広報（〃） ・校内放送でゲームの仕方を知らせる（〃） ・ゲームの仕方録画撮り（計画委員会・放送委員会） ・ゲームの仕方を教える（代表委員・担任） ・当日の録画撮り（放送委員会） ・集会後のスナップ写真を掲示する。（掲示委員会）		
6 日役割	司会	ゆうと・玲子	カードを持つ
	はじめのことば	小百合	放送機器
	終わりのことば	けいと	集会委員会
7 当日の流れ	時間	プログラム	方 法
	8:10	* なかよし学年でならぶ * 朝のあいさつ	指揮台 足ジャンケンカード 計画委員児童 ∞ ∞ ∞ ∞ ∞
	8:15	1 はじめのあいさつ 2 「足ジャンケン」説明 3 「足ジャンケン」ゲームをする	グー チョキ パー △△△△△△△△ △△△△△△△△ △△△△△

		 (6年と1年) (5年と2年) (4年と3年) * ならぶとき、高学年は、低学年の世話をする ・ 計画委員は、足ジャンケンカードを持って前に立つ。 ・ 計画委員対みんなで足ジャンケンをする。 ・ 3回負けたらすわる。
8:20	4 「おさななじみ」説明	・ 足ジャンケンが終わったら「おさななじみ」の説明を聞く。
	5 「おさななじみ」ゲームをする	指揮台 ▽▽ ▽▽ ▽▽ ▽▽ ▽▽ ▽▽ △▲ △▲ △▲ △▲ △▲ △▲ ▽▽ ▽▽ ▽▽ ▽▽ ▽▽ ▽▽ △▲ △▲ △▲ △▲ △▲ △▲ * 二人組になっているか確かめる。 ・ なかよし学年で二人組になり他の二人組とゲームをする。 ・ できるだけ他の学年ともゲームをする。 ・ 高学年は、低学年をリードしてゲームをする。
8:30	6 おわりのあいさつ	・ ゲームが終わったらそのままの状態ですわり、おわりのあいさつをする。

— なかよし学年の組み合わせ —

一 学 期	チーム	赤	黄	青
	学 年	6年+1年	5年+2年	4年+3年
	人 数	52+37 (89)	47+31 (78)	37+36 (73)
二 学 期	チーム	赤	黄	青
	学 年	6年+3年	5年+1年	4年+2年
	人 数	52+36 (88)	47+37 (84)	37+31 (68)
三 学 期	チーム	赤	黄	青
	学 年	6年+2年	5年+3年	4年+1年
	人 数	52+31 (83)	47+36 (83)	37+37 (74)

V 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 特別活動及び児童会活動の理論を研究することで、学校教育におけるその意義を確認できた。
- (2) 児童会活動の望ましい在り方を知り、児童会活動の実践を見直すきっかけになった。
- (3) 児童会活動における異学年交流の在り方を研究することで、児童会活動の新たな展開を見いだせた。
- (4) 異学年交流を取り入れたので、低学年児童と高学年児童の交流の場が作り出せ、高学年としての自覚や活動意欲が高まり、自発的、自主的な活動を促す機会がくれた。

2 課題

- (1) 今後の児童会活動に、異学年交流の内容をどのように取り入れ、どのような支援で児童の自発的、自主的活動を促すか研究を継続していきたい。
- (2) 児童会活動は、教師の支援の基に展開されるものであるため、全教師の共通理解をどのように図り、学級活動における取り組みを充実させていくか課題である。
- (3) 異学年交流を取り入れる場合、異学年共通の活動時間を設定する必要があるため、その時間をどう設定していくか学校全体の共通理解が必要である。

<主な参考文献>

文部省	『小学校指導書特別活動編』	東山書房	1997
成田國英	『小学校新教育課程を読む特別活動の解説と展開』	教育開発研究所	1989
杉田儀作	『特別活動実践論一画一化を克服する新しい展開一』	ぎょうせい	1985
児島邦宏	『特別活動改革叢書 1 学校新時代・特別活動の理論』	明治図書	1996